

研究

横川先生と佐伯 (一)

「郷土の研究」に学ぶもの

会員 山本 保

元佐伯鶴城高等学校教諭、横川末吉先生著「郷土の研究」昭和二十四年発行——を順次紹介させていただきます。

地理学者横川先生が、佐伯市南海部郡をいかば捉えて、いるかをお読みとり下さい。そして郷土の姿を再発見いたしましょう。

一 郷土の自然

1. リアス式海岸

佐伯市西上浦の彦岳に登つて、大入島から大島にかけての海岸線を見おろした人は、その美しい景色に驚くことにも、こんな出入りの多い海岸ができた不思議な原因について考えずにはいられないでしょう。(中略)

太平洋の中央にある夕ヒ千島という出入りの多い美しい火山島を研究した米國地理学者ダナが、はじめ、記念すべき海岸線発達の原因を発見しました。

それによりますと、私たちの郷土のように入りの多い湾のある海岸は、海的作用によつてできたのではなく、土地が海の中に沈んだため

にできたものかたそです。つまり、土地が海の中に沈んでゆきますと、はじめ陸地の山脈であったものは半島となり、半島であったものは島になり、平地であった所は入り江になりました。分りに今、佐伯地方が五十川沈んだとしたらどうなるでしょう。今の入り江より北もつと奥に細い入り江ができて、佐伯市の上堅田、鶴岡や、切畑村、上野村(現在弥生町)などは、海になることでしょう。また鶴見半島は豫戸で切れ、東中浦村(鶴見町丹波、梶寄)は島になることでしょう。

現在では、こんなに考えられていますが、實際一年にいくらづ沈んでいるかを観測するのはむづかしいことですし、所以よつては、反対に土地が高くなつていゝかではないかと思われ、る箇所もあります。

例えば、香取川近年々淡くなる上に、女島の埋めたての沖には浅瀬ができています。それで、いろいろと考察した学者は、今は沈降することがやんでいゝとか、それともたいへん少くもなつていゝとも申します。

皆さんは不思議に思われるでしょう。私たちの住んでいゝ地球の表面はそんな変動をするものでしょうか。そうです。(中略)

求水津村の溝代から坂にかつた、海抜十五センチからいゝと、そこに水平な砂の層があります。化石を見つけたもので、はつきり申されませんが、これは浅い海に堆積した部分で、その後隆起したものでないかと思おれます。

下堅田の汐月の奥にも同じような厚い砂の層

があります。

更に小野市村(宇目町)の中岳川に臨んだ三百加ぐらいの斜面に、見事な水平層を露見しました。砂の中には傾山の方から流れて来た、花崗岩質の岩石の風化した石砂を含んでいるようでした。

この三つの例から考えて、郷土のかなり広い部分が、近い時代には海の底にあつたことばかりがいないと思えます。その時代には、今の高い山だけが島のように海の上に出ていて、ちやうど瀬戸内海をつくりの景色ではなかったでしょうか。

もう少し考えましよう。

海岸で十五加ぐらいの高度の砂層が、約三十加奥地にゆくと三百加ぐらいの高さであるのは、どういふわけでしょうか。大塚弥之助博士の研究によつて、隆起は海岸では小さく、奥地ほど大であることがわかりました。つまり、浦代、下堅田、小野市などは、はじめ同じ高度に堆積したものが、奥地の小野市ではひどく隆起し、海岸地方の浦代では、少ししか隆起しなかつたのです。蒲戸崎や鶴見崎の骨はカイのような地形を見れば、この事情がよく理解されると思えます。

話をとにもどしましょう。

はじめ、郷土の海岸は、陸地が沈降してできたと申しました。いつの間にか、反対に陸地が隆起したことを話して、おかりにくくしましな。おとめて申しますと、多分、第三紀時代沈降によつて海岸線の基ができて、次に少し隆起

して、台地が海上に現われ、これが少し浸蝕せられて細い谷ができた後、又、おすかの沈降によつてできた入り江を、今盛んに番匠川や堅田川が埋めています。地殻はずいぶんたぶたぶ変動したものと、おわかりでしょうか。何か新しい機械ができて、特別の観測が行なわれたら、今でも、私たちの知らない間に、大きな海や深い海になる運動が営まれていることがあつかも知れません。

また、ほんとうはまたまた複雑な方法で変動しているかも知れません。(後略)

佐伯市野生の日豊本線踏切近くに「大分県自然公園

赤岳登山道入口」と書かれた大きな交標柱が、佐伯市商工観光課によつて建てられています。

赤岳の高さは六三九メートルです。

園木田独歩は、明治二十六年十一月十九日(日曜日)登山した様子を、次のように日誌に記しています。

此の日は終日、山(尺間山)より山へと跋涉はり、終に彦嶽と称する高山に登り、薄暮家に帰り候時は、月の光漸く宵の香に沁みそめし頃にて候

この時、独歩は弟收二と、鶴谷学館生徒武石素吉(本新武石医長尊氏)を伴つて、尺間山から鏡峠を経て赤岳まで山の尾根を歩いていました。

佐伯史談会も、近年、石神峠、霊山(大分市北六町)、尺間山(六〇八町)、元越山(八二町)、椿山(六五九町)、佩楯山(七五四町)、姫岳(六二〇町)、鏡峠、榎笠山などを踏破しています。その踏登記が、時折り發表されています。羽柴弘氏が、

「娘岳に登る」の踏査記の中で

私は大きな課題が残った。それは娘岳の巖に於ける考岳とのつきりである。つまり娘岳——八戸高原——鏡峠とつないでの、考岳との連続で、何か文献によつて解明したい。そして何時の日にか、この山道を一日かけて歩いて見たいという願望である。

一文に、強い興味を覚えました。  
国木田独歩が横川末吉先生、それに佐伯史談会員が登山を試みていますが、おたしたちも同じように、故郷へ佐伯市、南海郡の山々について再認識をする必要があるのではなにかと思おれます。

佐伯湾には中央に大入島があり、鶴見崎の半島は複雑多岐な岬を生じて突出し、九州山地がこの地において、いちじるしく沈降したことを物語っています。沈降は地層が断層やしりや曲などの原因で、池下して海底になつたり、海水面が上がつて、陸地が海底になつたりすることです。

先端の大島は、海蝕によつて根柢から切断されたもので、岬の東側に発達している高い海蝕崖を見れば、よくわかります。

佐伯湾に流氷こんでいる番匠川の堆積は、いちじるしく、かつての島、女島、長島、三角洲の一部として続いています。番匠川、堅田川の下流域には、白濁、長瀬、波越、汐月、江頭、柏江などの海岸地名が多く、汐月近くの下城、長良地域で貝塚が発掘されましたが、これによつて、佐伯市の沖積地は意外に新しいものではないかと推測されています。

蒲江町の洲崎(西の浦)、深島、北市尾、崖形島などの砂洲や小規模の潟は、太平洋の波浪によつて形成された

ものだと考えられています。

佐賀関から蒲江町にかけては、出入りの多い複雑な海岸になつていますが、これは土地が沈降したために、元の尾根と岬となり、低地は入り江となつて、現在の海岸線を形成しています。これがリアス式海岸で、日豊国定海岸昇格運動と同時に、世間の脚光を浴びようとしています。海岸の宇和海は、国定公園から国立公園に昇格しました。

化石の七むかし地層がでけるとき、当時、そこに住んでいた生物の死がいや貝がら、木の葉などが、土砂と一階に積もつたり、また、生物の足あとや、すんでいた穴などが地層の中に入つていくことがあります。このようなものを化石といいますが、その化石をしらべることによつて、その岩石が出来た時代や、そのころのおよその様子がわかります。

隆起 地表が造陸運動(剥合)にない範囲の地域が、いちように隆起、沈降すること)や造山運動(せまい範囲の土地が、垂直に大きく隆起したり沈降したりすること)などで隆起したり、海水面が低くなつたりします。これを隆起といいますが、花崗岩(ハカコウウ岩)は深成岩の一つです。無色鉱物の石英、長石、有色鉱物の黒雲母からできています。石英は長石の量が、黒雲母の量より多い場合に多いので白っぽく見えます。かたくて美しいため、建築、しき石、石段、石垣、墓石などに利用されます。

第三紀時代 日本列島はどのような出来かたで、いかに、化石などを調べて次のように考えました。

今から三億年ぐらゐ前、大陸にはシダの大森林がおいしげづいていました。一方日本の島は、大

海の底深くに眠っていました。日本の島をつくっている地層は岩石の中で、一番古いものは、今から三億年前に出来た古生代の地層です。古生層をつくっているおもしろい化石は、粘板岩、砂岩、珪岩、輝緑凝灰岩、石灰岩、礫岩などで、その中には、時々めずらしい化石がほいでいます。エビやカニの先祖の三葉虫の化石も、サンゴの石、腕足類といつてちよつと二枚貝のようなものがこの動物の化石などがそれです。こうした化石類は、すべて海に住んでいた生物です。そのため、この古生代の地層は、そのころ海の中に沈んでいた証拠となるわけです。

日本の島が、ようやく海の上に乗せあらわしはじめたのは、古生代の終り頃(約二億年前)たぶんといわれています。それは、世界中におこつたバリスカンと呼ばれる大造山運動によるものでした。四国北部、瀬戸内海地方にかけて分布している花崗岩は、この時代でできたものであるといわれています。

このあたりから、約七千万年ほどの間、日本の土地の変動はおだやかでした。ところが中生代のおあり(一、二億年前)の頃、またおどろしい地殻の変動が始まりました。これが世界中におこつたアルプスといわれる大造山運動の一つです。

いふいふ大造山運動によって、日本の島と大陸のあいだは、地つづきになつたり、海にたぢきられたりしました。

約百万年ぐらゐ前(第三紀時代)の頃には、ゾウの先

祖が大陸から、陸すたいに日本に渡つてきたようです。

この頃また、小中規模の地層のしゅう曲(かたむい)たりしわがよつたりする(も)が断層(たぢ切)られたり、地層はくいちがいができる(も)がひんばんにおこり、また火山もさかん(も)に爆発しました。現在の火山帯は、このころでき左もので、それがいまなお、所々で爆発をおこしているわけです。

このようにして、日本列島の島々の形が、今のようになり、あがつたのは、およそ二万年ぐらゐ前のことと考へられてはいます。

そして、私たちの祖先が、どこからかこの島に渡つてきて、原始的な生活を始めました。(つづく)

記録

羊柴集會の記

(羊柴幹事)

○ 羊柴集會が毎年おこなわれている羊柴集會、今日(社会通念から言へば)忘年会に当るが、私共の内容はすくなく一年間の反省集であり、研修したことの落穂を拾う会であり、来手に対する期待を語る会である。勿論一林もやり、大に懇談を交ふ。

○ それを、昔の十六日(土曜日の午後)、静かな山手通りにおる旅館(た)やで行つた。出席者二十名(女)が、(も)盛會(も)あつた。

○ 日おける(も)字(も)新(も)千(も)東(も)から(も)茶(も)加(も)の(も)動(も)化(も)氏(も)が(も)自(も)撮(も)影(も)し、(も)自(も)ら(も)現(も)像(も)技(も)術(も)引(も)伸(も)した(も)各(も)地(も)の(も)石(も)造(も)文(も)化(も)財(も)産(も)層(も)塔(も)也(も)空(も)塔(も)の(も)獲(も)三(も)葉(も)日(も)かり(も)を、(も)用(も)意(も)さ(も)れて(も)いた(も)大(も)型(も)の(も)台(も)紙(も)に(も)貼(も)示(も)し、(も)こ(も)ま(も)ま(も)と(も)説(も)明(も)を(も)いた(も)いた(も)日(も)は(も)お(も)り(も)が(も)大(も)か(も)つ(も)た、

○ 以下懇談会となり、懇話(も)に(も)趣(も)を(も)つ(も)くし、散會した(も)は(も)四(も)時半(も)であ(も)つ(も)た。

○ 羊柴幹事は年間の研修実績を(も)か(も)え(も)り(も)て、(も)自(も)ら(も)評(も)価(も)八(も)七(も)点(も)と(も)表(も)示(も)した(も)也(も)は(も)り(も)よ(も)く(も)や(も)つ(も)た(も)二(も)年(も)であ(も)つ(も)た。

○ 史談、發行は(も)計(も)画(も)連(も)り(も)百(も)分(も)の(も)実(も)績(も)、(も)その(も)印(も)刷(も)也(も)發(も)送(も)、(も)紙(も)背(も)に(も)努(も)めて(も)下(も)さ(も)つ(も)た(も)方(も)は(も)い(も)さ(も)さ(も)か(も)の(も)を(も)呈(も)上(も)し(も)謝(も)意(も)を(も)表(も)した、